

## ●図書紹介●

## 『状況倫理』

高野成彦 著

## 『教育的課題としての

本書を読み終えて脳裏に浮かんだこと、それは、本書が「現場を哲学することへの挑戦の書」である、ということである。しかも、その挑戦はまさに「現場」のまっただ中で行われた。私は、学校現場へ意識的に出向いている者の一人であるつもりだが、昨今の現場の先生方の仕事量は中途半端なものではない。ましてや、各学年6クラス、計18クラスの中学校となれば、その多忙さは想像に余りあるものがある。そのような〈状況〉のなかで、「現場で現場を哲学することに挑戦した」高野氏の勇氣と努力には〈敬服〉という言葉以外に適切な言葉が見あたらない。

高野氏によれば、「状況倫理」とは「決断に際して、前提としての『原理』をもちつつ、〈状況〉にふさわしく、良心に従い責任を持って主体的に決断するという在り方」である。子どもは、状況に応じて自己の態度を決定するという、おとながすることを初めは理解できない。したがって、おとなは子どもに、その決断に当たって何が問題であるかを理解させなければならず、ここに教育が成立することになる。教育とは、常に、ある具体的な「状況」において成立するものであり、教師は、子どもがまさに援助を必要としている、この特定の具体的状況を理解して、その子どもに適切な指導を行わなければならない。したがって、教育において重要なことは、状況が何を要求しているかという状況認識であり、教育学は状況への関与を避ける状況喪失的なものであってはならず、状況に向かって進まなければならない。ここに、高野氏は、教育学が「状況」を主題にすることの意義を見いだす。

以上のような問題意識のもとで、本書は、これま

での「状況倫理」の思想を分析・検討・整理し、この思想の特徴を明らかにし、その理論的枠組みを構築することを目的としている。より具体的には、状況倫理をキリスト教倫理の立場で顕著に主張するフレッチャー (Joseph Fletcher)、実存哲学の立場で哲学的倫理学を展開するヤスパース、哲学的解釈学の立場で解釈学的倫理学を展開するガードナー、の3人の所論を中心に考察がなされる。「第1章 フレッチャーの状況倫理」「第2章 実存的生における決断の意味」「第3章 決断における状況の理解」がその考察に当てられている。さらに高野氏は、「第4章 状況倫理による教育の基礎づけ」において、「教師の教育的行為を可能にする技量」としての「教育的タクト」と「状況倫理」の共通性を明らかにし、「第5章 教育的課題としての状況倫理」においては、自身が担当した生徒たちの作文の分析を試みている。第5章第1節の最後の部分で、高野氏は、「中学生の日常的感覚の中の比較的一般に見られる、これら『状況倫理』への萌芽を、教師が意識的自覚的に取り出しながら、再び、生徒に戻し、その肯定的側面を強化していくとき、『状況倫理』への教育が始まる」と述べ、現場と「状況倫理」との接点を具体的に見いだしている。「思考力」「判断力」の重要性が強調され、「生きる力」の育成が目指される今日、高野氏も言うように、「状況倫理」を論ずる時が熟しているのかもしれない。

「状況倫理」を学校現場で問うことによる「臨床教育学」の構築という高野氏の構想を、これから注目しつつ見守り続けたいと思う。

(上越教育大学 木村吉彦)

●青磁書房、A5判、194頁、3,000円(本体)